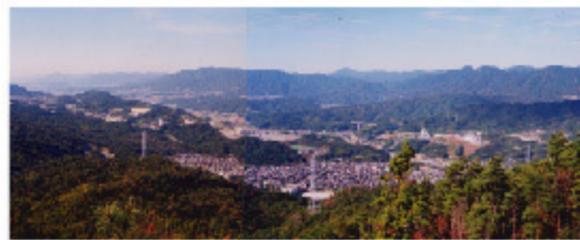
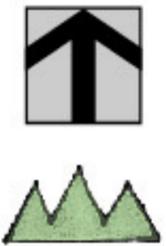


# いろいろあるよ 石内マップ



佐伯区ふるさと文庫

- 石内市指定保存物
- ・浄徳寺の石造菩薩像
  - ・浄安寺のイチョウ

① 神原のガバガ



向山の麓、向山にある古木、昭和48年、近畿道の天然記念物に指定される。樹齢は300年以上。開花時は葉に見事。

② 中講のヨリマ



幹回り1周高3m、樹高に3.2m、樹高では県下第一とされる。名の由来は和歌山県の高野山に多いことにも、樹齢約100年。

③ 半坂の石仏



半坂から平岩にまで古代山陽道の峠にある石仏。形が化かまに似ているので石仏と名付けられ、今もなお解の花が供えられている。

向山



瀬戸内海の島嶼が隆起した水戸平は半平野であったとされ、向山の頂上からは眺せられ、石内川が一望できる。

源氏大休の塚



平家追討に際し源頼朝が木戸川と宮を築いた。頼朝が長く、寄りここのよの岩がある。

向山の手打が滝



向山の手打 石内川の源流は50m〜60mの滝である。手打(滝)とよばれる。

① 金剛院



高尾から石内川源流に降り、近江守の地蔵菩薩は300年。西国88の第93番とされている。

② 浄土寺



昔は浄土寺であったが、22年(1553)に復興に成功する。平岩山寺とよばれる。浄土寺の文化の中心地がある。

④ 細末製菓所の水車小屋跡

細末製菓所によって建てられたとされる。昭和36年頃に廃止されている。

⑤ 平岩の墓



寛政12年(1800)日、福下川の上流で水害にあつた。墓、安んじ(石造)がある。

⑥ 大津の岩礁



石内川の改修工事の際、大津の岩礁の下流で出土した。

③ 浄安寺薬師



水車として築かれた。高さ84.5m、座高58.0mの木造。内蔵文化財に指定されている。

④ 白山八幡神社



昔、水鏡ヶ城の山麓の小さな祠として築かれた。明治4年(1871)に石内村の神社として奉祀される。境内には土蔵がある。石内市重要文化財指定が2棟指定されている。

⑤ 迫口観音



下津、迫口、石内川の合流、石内の上にある。観音菩薩がまつられている。

⑦ 難波一甫の碑



難波一甫の碑、大正形交野の記念碑。難波一甫は幕府時代、武器を持たない農民や町人が護身用として作った武器の一種である。

⑧ 公民館の弥生式住居



石内の石造により、弥生時代を復元したもの。石内公民館のシンボリック存在である。

⑥ 新宮神社跡



明治4年(1871)白山八幡神社に合併されるまで石内村の神社であった。現在は古くからの老人の集まりとして利用されている。

⑦ 滝の観音



石内川の滝の観音。村人の信仰の中心地。観音菩薩の像は美しい水加減がある。石内川、3リ……?

⑨ 瑠璃光水跡



二子山、石内川の下流に瑠璃光水跡がある。石内川源流の地。瑠璃光水跡は、石内川源流の地。石内川源流の地。

⑩ 文化財収蔵庫



これは、昭和30年、五日市町と合併するまでは石内村役場であった。ここに石内川の祖先が生活に使用した道具、民具が収蔵されている。

⑧ 浄徳寺観音



石内にある。古くは白山八幡神社とよばれる。本尊は、観音菩薩である。

⑩ 積迦が岳



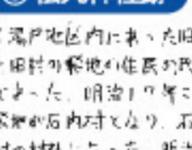
高さ43.3m。大正10年とよばれる。石内川の源流の地。石内川源流の地。

⑪ 永井建子生誕の地跡



1867年(明治)に生れた。フランス留学後、日本音楽の発展に努めた。永井建子生誕の地。

⑨ 松丸神社跡



古くは石内川源流の地。大正10年とよばれる。石内川の源流の地。石内川源流の地。

⑤ 水晶ヶ城跡



源平の時代から戦国時代にかけての石内川の源流の地。石内川源流の地。

⑫ ふるさとの川



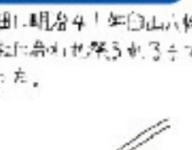
石内川源流の地。ふるさとの川(モデル事業)。

⑫ ふるさとの川



ふるさとの川。ふるさとの川。ふるさとの川。

⑩ 貴船神社跡



初田(明治4年)白山八幡神社に合併されるまであった。

⑪ 京良木山



石内川源流の地。京良木山。

⑬ 百石



その石、石内川源流の地。百石。

⑭ 湯戸の井戸



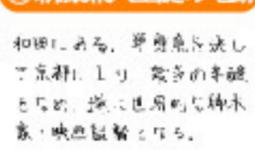
昔、湯戸の井戸。湯戸の井戸。

⑮ 湯戸のイザガ



湯戸のイザガ。湯戸のイザガ。

⑯ 新藤兼人生誕の地跡



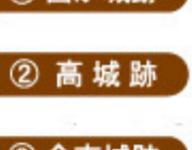
和歌山にある。新藤兼人生誕の地跡。

⑦ 有井城跡



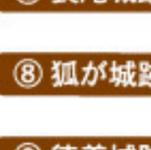
石内川源流の地。有井城跡。

① 西が城跡



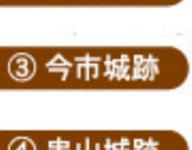
石内川源流の地。西が城跡。

⑥ 長尾城跡



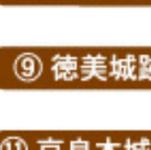
石内川源流の地。長尾城跡。

② 高城跡



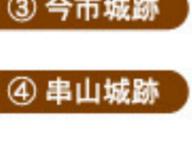
石内川源流の地。高城跡。

⑧ 狐が城跡



石内川源流の地。狐が城跡。

③ 今市城跡



石内川源流の地。今市城跡。

⑨ 徳美城跡



石内川源流の地。徳美城跡。

④ 串山城跡



石内川源流の地。串山城跡。

⑪ 京良木城跡



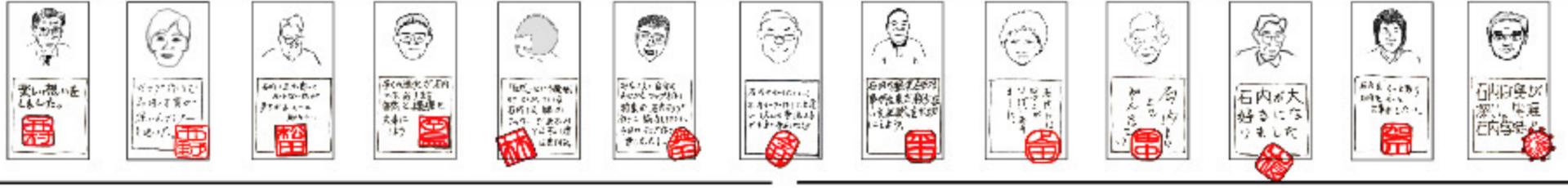
石内川源流の地。京良木城跡。

石内の城

石内は源平時代、源氏と平家。戦国時代には大内氏と武田氏の勢力の争奪地であった。大内氏滅亡後、石内は徳川氏に属した。石内川源流の地。

- ・水晶ヶ城(石内城)
- ・新井城
- ・新井城跡
- ・高城
- ・今市城
- ・長尾城
- ・出山城
- ・京良木城
- ・湯戸城
- ・五ヶ嶽
- ・徳美城

# 石内の伝説



## 石内村の半屋

今から370年くらい前(江戸時代前期1630年頃)、浅野家老の浅野左衛門が石内村の館主(知行)の頃、石内村に半屋があった。場所は平野地区にあった。そこには菅道の「かげとものみち」が通っている。約170年後(1803年一享3年)に備前半屋の屋根の葺替修繕が行われた。工事経費用は米123石7分9厘、米の石高は4315石52斗、これを19ヶ村に振り分けた。(当時、米1石につき2厘8毛9分8厘)石内村の割当は全費用の半分以上に当たる米64石2分3厘、米は2239石で他の村より飛びぬけて多かった。ちなみに他の村の古江村34石、高井村は368石で多いのは高田郡の上板村100石、加茂郡高尾村200石、高尾郡九品村の1032石等が際立って多かったという記録が残っている。その後、半屋は何年まで存在していたかは不明である。



## 青い石

貴船神社(現在は存在しない)のそばに、まるで蛇が巻きついているように真がからんだ大きな樹の木があった。戦時中の食糧不足の時、その木が影になって畑の雑草がでさえないので、近くに住民がその木にさわったところ、その時に菌毒(生薬炭)で苦しんだという。それで、ある人がその木で割ってからの木を切ったところ、下から青い石が出てきたという。

## まと石

昔、現在の「杜の宿」の中に「まと石」という三角形の石を祀った小さなお堂があった。かつてあのあたりには毒虫や嵐がたくさんいてそれを祀って「くちなお神さん」と言っていた。その嵐が神様になって白濁の嵐に強化したらしい蛇が三角形の石にぐるぐる巻きついている右の石を祀ってとお堂に祀られるようになって「まと石」と呼ばれた。現在は石内バイパス沿いの石内下里の奥に引越して新しいお堂の中にその「まと石」は祀っている。



## 菅原道真公の紅梅

その昔、菅原道真公が九州の太宰府に左遷される道中の事である。一行が石内村にさしかかると、従者の一人が急にひどい腹痛に発せられ、どうにもこうにも癒げなくなりました。やむなく、道真公はその従者に「林間が良くならん来るように。」と言い残して太宰府へと向かわれた。ところが、従者の病気が癒えるのにかぎりの年が経ってしまひ、その時には道真公は既に死んでおられた。従者は嘆息し、京の都から道真公の紅梅と木造のお地蔵さんとを帯びて来て、石内村のある場所へ、歩いて六十歩四方の範囲を自分の住まいと決め、紅梅を植えてお地蔵さんを祀った。そして、自分の家紋を梅の家紋とし、終生、道真公を慕って暮らしたということである。京の都から持ってきた梅は「二つ成りの梅」と言われて千年もの長い間、二つの実をつけたそうぞ、残念ながら、今はその「二つ成りの梅」の木は無いが、お地蔵さんは残っている。



## 代溝(しろみて)

石内の上(かみ)の方の集落で、田植えが済んだので集落全体で餅(すきやき)を食べようという事になった。餅はそれぞれの家から三合ずつ持ち寄り、肉や醤油、砂糖を持ち寄りおごうさん(奥さんの事)は醤油ご飯を炊いて、なますを作った。夜の7時頃から宴会が始めたが、不思議な事に誰も口を動かさなかった。おかしいと思ってよく確かめたら、一人くらいはわからないだろうと思って、餅が水を持って来たいたのだった。(注)代溝(しろみて)とは田植えが済んだ様子という。



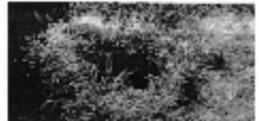
## めでたしや

昔、田代谷に子どものいない老夫婦が生んでた。子どもがいなくて寂しい思いをしていたが、そうするうちに何と子どもができた。これはめでたしということとその子どもの名前も「めでたし」にした。すると翌年、次男が生まれた。こりゃあ男の子が二人になった、嬉しいので「うれしや」にした。次の年三男が生まれた。こりゃあ男の子が三人になった。あれほどでねえかよって三人も前借りで生ませたいというので、名前も「たのしや」にした。月日がたつて、子どもも成長し、長男は17歳になった。仕事もよく手付した。ある日、お婆さんが風邪をひいて具合が悪いので、お婆さんの代わりに兄弟三人は山へ仕事に行った。翌朝、お婆さんが危篤状態になったので、お婆さんは子どもを呼びに山へ来た。「お〜い、お婆さんが死にそうなんじゃあ、めでたしや、うれしや、たのしや、はよう山を下りてもどれや〜。」



## いで湯の話

ずっと昔、瀬戸の熊野寺(別名淨徳寺)の境内に湯が湧いていた。その湯で石内のお手洗いさんが汚れたものを洗濯してたら、湧いていた湯が水になってしまった。現在ではただの穴けけになってしまったが、今でも湯が湧いてもそこは湯が湧くらしく、すぐ溢れるという。ここからこのあたりは「瀬戸」という地名がつけられた。



## 三の坪のおさん狐

今の石内の上沖地区から隣の木田地区に通る道の一つに、三の坪という山頂がある。そこには昔、人をぞます悪狐がいたという。ある日のこと、村のお婆さんが娘の結婚式で左右の肩に振り分けて持って帰らなければならぬ程の土産をもらった。その帰り、寂しい三の坪の夜道を歩いていると、ひょっこり知人に会った。やあ、これは誰か来た、心細さが半減したと喜んでお婆さん。「ばあさんや、今帰ったよ。三の坪で〇〇さんに会って助かったよ。さあ、ごちそうを沢山もらったので食べようや。」と田舎のそばで土産を贈りあてると、そこにはなげか、黒狐が入っていたのだった。やあやあ三の坪で出会ったのは狐だったのじゃあ・・・とさ。

## 糸引き婆さん

百石に墓があるが、その墓を粗末にしたり障たりすると祟りがあるとされている。天保時代の3年続きの大飢饉の際、砂谷(現在の湯来町砂谷地区)から2人を連れて、石内に出陣に来ていたお婆さんがいた。彼女の特技は糸引きで、「ブーン ブーン」と糸車をまわして鏡から糸を紡いで、はた織りの手取りをしていた。そのお婆さんはどこからかひっぱりだこで、各家を回れば三人ぐらいは何か食べさせてもらえた。ところが、お婆さんがひんどくなり、石内のある食糧がなくなってきた。ある朝の朝の露の降る朝に、村の人が驚かすように、糸引き婆さんのところへ行って見ると、3人が横たわって死んでた。村人がかわいそうだと聞いて、仮に石を3つほど道路の側に置いて墓に見立ててお経を上げたという。



(注)糸引きの老女は糸紡ぎなどして諸所をまわり、歩き巫女のような運命の持ち主であったとされている。

## むつつうじ狐

昔、河内の野野原と石内の徳利の間に六差路があった。その六差路のことを「むつつうじ」と言われていた。ある村人が、木材を切り出す馬を取り替えるため、夜中にむつつうじ峠に外へ出る事になった。爺さんが、「むつつうじには狐がいるので夜中には通らんがええな。」と言ったが、馬は「なあに、馬を連れていってるん大丈夫。」と言って黙ってトコトコ歩きた。ところが、ひょっとと思いがけいようになり、馬が動かなくなった。すると馬がクルクルと回って、来た道を走って帰った。「馬が戻ったのに爺さんがもどらんじゃあないか。」と、狐のことを思った爺さんが馬をよく見ると、後ろ足が尻にまみれていた。「それ、狐が後ろから上がるうと見たに違いない、むつつうじには昔から狐があるんじゃあえ。」と言った。すると、地元のお婆さんが、「大きな白狐が尾ひきを振って横切ったのを見たよ。」と言ったそうぞ。



## 蚊なしの谷

白山神社の下は蚊が多くて寂しい所だった。このお婆さんは養子で仏の大道さんと呼ばれていた。返りて、お婆さんは蚊退きと言われていた。ある大嵐の時、みすばらしいお坊さんが「お婆さん、何してたの？」とやって来た。お婆さんは反対したが、お婆さんは何となく思い留まてあてた。翌朝、起きてみると雪が三尺(約1メートル)ぐらい積もっていた。お婆さんは「今日には出ていってほしい」とお坊さんに告げた。するとお坊さんは、「はい出ます。お泊りして帰らせてあげよう。何か礼がしたいがここは冬でも蚊が多いので、おらんようにしてあげよう。」と言って家を出た。二日後、村の人がお坊さんに行ってみると、稲荷堂の前でお坊さんが死んでいた。稲荷堂のお供えを食べてようとして、鉢の前で死んでいたのだった。村人は、お坊さんを奥の山越にねんころり埋骨した。それ以来、谷の下には蚊がいないということである。



## 浄安寺の薬師さんと珊瑚光水

現在、浄安寺には異色があざわためる薬師像がある。その昔、羽林がその仙像を盗んで、背負って逃げたそうぞ。向かい山(現在の杜の前あたり)まで言ったところで、重たくなって倒れてしまった。(それでその持った「仙像」というようになった。)その仙像を石内村の者が見つけて持ち帰って池で洗った。その池は後に珊瑚光水と呼ばれるようになった。珊瑚光水は最近まであったが、山越道の建設の際に埋めてしまった。その頃までは地温が上がりすぎていた。どんな薬師も治さず、物に眼病に効くとされていた。

